

月刊

2017

5
月号

みんぱく

特集

めぐる 手話の世界を



ハンドトーク ジラファン
©KADO/Handmade Creative 2017

手話の世界へようこそ 菊澤律子 / 手話をとおしてみる新しい世界 木村晴美

コードにのっての「手話」とは 中津真美 / 聴者が手話を学ぶ 飯泉菜穂子

台湾でのフィールドワークをはじめると 相良啓子

日本手話と香港手話を比べてみると 池田ますみ / 手話展示の空間と時間 井上史雄

手話と「ハンドトーク」

門 秀彦

プロフィール
「HAND TALK」をコンセプトに、絵画作品の制作の他、国内外でのワークショップやライブペインティングをおこなう。その他NHK「みんなの手話」、フジテレビ「めざましテレビ」等のアニメーション作品の制作、宮本直門、佐野元春、HY、大澤誉志幸等のアーティストを手掛けるなど、創作は多岐に渡る。著書に、『ハンドトーク ジラファン』（小学館）、『RING BELLS』（ぶんか社）、『世界がこんなに騒がしい日は』（シャイ乙）他がある。

手話は体で表現する「言葉」であり、目に
見える「声」である。

僕は両親がろうあ者なので幼い頃から父や母の「声」をこの目で見てきた。優しい声、楽しい声、怒りの声、そして悲しい声。父や母の「声」はいつだってストレートに伝わって来た。もちろん見えるのはろうあ者の「声」だけじゃなく、健聴者の「声」でもある。聞こえないことをいいことに、顔では笑顔を作りながら哀れんだり、蔑んだりする者の「声」は、ひどく気味の悪い「声」に見えて、幼い僕には恐怖だった。しかし、健聴者の「声」に感動することももある。それは、ろうあ者である父や母と、手話を知らない健聴者が、筆談やジェスチャーですつかり仲良くなってしまう光景を見た時だ。僕の幼馴染などは、うちに遊びに来ると、父や母とオーバーな身振り手振り顔の表情を思いっきり動かして騒がしく会話して、一緒に飯を食い、時には抱き合い、そして泣くのだ。その「声」は父と母だけではなく、その場にいる僕にも伝わるほど。その幼馴染は十代の頃
はかなりやんちゃで悪さもした男なのだが、や

がて立派な大人になった今でも「お父さんの優しさに何度も救われた」と礼を言う。父と母は、最初から相手を理解しようとするのではなく、ただ相手を受け入れるのだ。そして笑いかけて一緒に飯を食うのだ。

僕が描いた絵本『ハンドトーク ジラファン』には、手話で会話するジラファンという動物が登場するが、モデルとなったのは僕の父と母だ。ジラファンは喋るのが苦手な健聴者の子供「ムール」と出会い、最初は会話を通じないが、お互いがお互いを受け入れる事でやがて心が通じ合うという物語。ここでいう「ハンドトーク」とは、いわゆる手話（サインランゲージ）だけを指すのではなく、人と人をつなぐ目的の音楽や、みんなで一緒に描く絵、感情や祈りを込めて踊るダンスや、親が子を想って作る手料理やお弁当も「ハンドトーク」と呼びたい。

父と母の手話が教えてくれたハンドトーク。それは特別な事ではなく、相手に話しかけ、相手を受け入れる方法。きつと誰しも、自分なりの「ハンドトーク」を持っている。

月刊
みんな

5月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
手話と「ハンドトーク」
門 秀彦</p> <p>特集 手話の世界をめぐる</p> <p>2 手話の世界へようこそ
菊澤 律子</p> <p>4 手話をとおしてみる新しい世界
木村 晴美</p> <p>5 コーダにとっての「手話」とは
中津 真美</p> <p>6 聴者が手話を学ぶ ― 第二言語としての日本手話習得
飯泉 菜穂子</p> <p>7 台湾でのフィールドワークをはじめのまで
相良 啓子</p> <p>8 日本手話と香港手話を比べてみると
池田 ますみ</p> <p>9 手話展示の空間と時間
井上 史雄</p> | <p>10 ○〇してみました世界のフィールド
英霊の記憶保存
黒田 賢治</p> <p>12 みんなく Information</p> <p>14 想像界の生物相
人魚とジュゴン
―― オーストラリア・アーネムランドの神話と美術
小山 修三</p> <p>16 新世紀ミュージアム
アシウィ・アワン博物館・遺産センター
伊藤 敦規</p> <p>18 手芸考
中国雲南省モンの刺繍から手芸を考える
宮脇 千絵</p> <p>20 ながなんちゃ
ナンが名ちゃ
寺村 裕史</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

特集 手話の世界を めぐる

目に見えることば「手話」。その世界はじつに奥が深い。今号の特集では、手話を日常的に使っている研究者の目線から自身の生活、仕事、調査等において印象に残ったエピソードを紹介していく。手話が誰かの日常に存在する「ことば」であることが見えてくるだろう。

手話の世界へ ようこそ

菊澤 律子
きくさわ りつこ

民博 人類基礎理論研究部

手話のむこうに広がる宇宙

通学経路のどこかにろう学校があったのか、高校時代、わたしはよく、手話でいきいきと会話をする生徒さんたちを見かけた。電車の窓を隔てた中と外で、駅のホームとホームで、声が届かない場所でも自由に会話を続ける彼らは、とてもうらやましい存在だった。歳月を経てここ数年は、手話

語に基づき、ひとつの民族と位置付けられるはずだ。かくて、日本手話話者は「ろう者」とよばれる者が共有する文化や帰属意識は、「ろう文化」とよばれるようになり、「日本における最大多数のマイノリティ」として、医学的な意味で耳が聴こえない「聴覚障がい者」と区別されるようになった。一九九〇年代後半に発達したこの考え方は、ろう者の自身の言語に対する見方に大きな影響を与えることになる。同時に、ろう者にとっては日本語が第二言語であること、手話言語が音声言語からは独立した歴史をもつことへの理解にもつな



手話での会話風景。音声を使う会話とは位置のとり方や話者間の距離が異なっている

言語法の制定やいわゆる差別解消法の施行など、手話に関する話題を頻繁に目にするようになり、昨二〇一六年には、民博でも「みんなく手話部門」(正式名称・日本財団助成手話言語学研究部門)が発足した。手話やその話者とかかわりはじめてみれば、そこには外からは見えない世界が広がっている。

そもそも「手話」とよばれるものは、一様ではない。日本語を音声で話しながら手を動かす方法は、「日本語対応手話」とよばれ、日本語の表現方法の一種である。これに対し、ろう者が使用する「日本手話」は、主語や目的語などの標示に空間を利用するなど、異なる文法構造をもっていて、日本語と同時に発話することはできない。独自の概念や言語行動満載で、外国語を学び、はじめて使えるようになったときの、あのわくわく感を感じさせてくれる。一方で、日本手話とは接点のな

かった。例えば、アメリカ手話はフランス手話の系譜を引いており、台湾手話や韓国手話は日本手話の影響を強く受けている。

ここでも、わたしたちは手話にまつわる多様性から解放されはしない。音声言語の場合に自然に起こる言語継承でさえ、手話の世界では一律ではない。親がろうで子どもも聴こえなければ、日本手話を文字どおり「(父)母語」として習得する。けれども、聴こえない子どもも多くは聴こえる親に生まれ、手話を家庭の外のコミュニティで身に付ける。一方で、ろうの親に生まれ、日本手話を習得した聴こえる子どもは、言語も文化も共有しているのに、「ろう者」ではないのだろうか？

多くの日本語話者の暮らしと異なり、言語接触が日常的であるのもまた、手話の世界だ。そこには「筆談」も含まれる。両手に加え、顔の表情、口の形や上半身の向きなど、同時に複数の器官を使う手話言語には、書記法がない。日本手話話者がメモをとるときには書記日本語を使う。ろう者にとって「読み書き」という行為が二言語併用であることに気づけば、筆談や字幕と手話の関係についても、これまでと違う側面が見えてくるのではなからうか。

手話のある暮らしをめぐる

そして手話にはもちろん、人間が使うことばとして音声言語と共通の特徴がある。国内には地域や社会方言差があり、国外に目を向けてみれば、世界で使われる手話言語は、約三百とも四百とも



みんなく手話部門ロゴ(平林裕一作成)
Minpaku Sign Language のインシヤルM, S, L
で民族を表す手話を表現したもの。部門の手話名を表現しているようにも見える。SILLR(シラー)は英文名Sign Language Linguistics Research Sectionの略称。

い地域に聴覚障がい者がいると、身振りによる意思疎通の方法が新しく発達する。それは地元でのみ通じる記号の集合体であり、「ホームサイン」「ピレッジサイン」とよばれる。

言語としての日本手話、民族としてのろう者

日本手話が言語であるならば、その話者は、言



手話言語学事業における講演者と通訳者の打合せ風景。
具体例の確認は、正確な通訳のためには必須である

いわれている。新たな世界の探求の対象としては十二分といえる。日本語話者のわたしたちが英語や他の外国語を学ぶように、日本手話を使うろう者は、外国手話を身に付け、駆使して世界を飛び回る。

文化も生物も言語も、何でも多様な方がいい。手話は、これまで音声の世界に閉じ込められてきたわたしたちを、視覚の世界に解放してくれる。本特集で紹介するのは、日本手話を使って暮らししている人たちの話である。理屈はともかく、まずは、その豊かな世界をめぐってみてほしい。

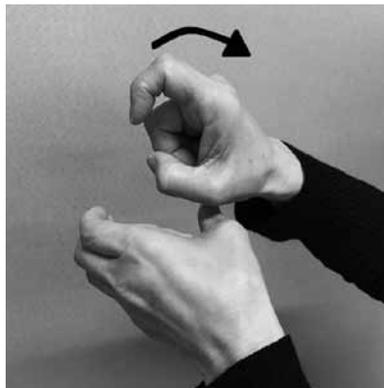
手話をとおしてみろ 新しい世界

木村 晴美

国立障害者リハビリテーションセンター学院
手話通訳学科教官

ジェネレーション・ギャップ

言語は世界を映し出す。手話は特にその傾向が強いのではないかと思う。同僚に二〇近くも年下のろう者がいるのだが、悲しいことに手話をとおしてジェネレーション・ギャップを感じる 경우가少なくない。その一例を紹介しよう。「コップを置



ステイオンタブで開ける



缶切りで開ける

く」「本を並べる」といった文では特に感じないが、缶のように進化するモノの場合、同一の缶のことを指してはいても、「缶を開ける」という文で、わたしと同僚の表現は異なる。まさにジェネレーション・ギャップだ。彼は「ステイオンタブで開ける」、わたしは「缶切りで開ける」なのだ。わたし自身も実生活ではプルトップ缶やイージーオープン缶を使っていて、缶切りの出番はほとんどないのだが、手話だとどうしても「缶切りで開ける」となる。手話にはろう者の世界観が映し出されているが、同じ日本手話ネイティブでも世代によって異なるということだ。ちなみに同僚は缶切りを使ったことがないという。

奄美大島での体験

むかしのことになるが、奄美大島に調査に行ったことがある。そこで不学のろう者と話す機会があったが、彼のホームサインがわからない。そこで鹿児島のある学校に行っていた彼の子どもに翻訳してもらった。彼は漁師で、鳥の人達とはホームサインで会話していた。獲った魚をセリに出すときも市場でのやりとりにも不自由はなかった。切り身のバッ

クしか見たことがない都会育ちのろう者は「魚」(イカ)「タコ」などのわずかな手話しか使えない。だが、そのろうの漁師は、イカひとつとっても、水イカ、甲イカ、ヤリイカ、スルメイカなどといった手話名をもっていた。サトウキビで生計を立てているろう者もいて、サトウキビにも手話名があることに驚いた。本州には生息しないハブにも手話名があった。生活に密着したモノには必ずそれを表現する語があるというということだ。だが、残念ながら、わたしはその語を正確に再現することができない。手話が文字をもたない故の悲劇だ。

手話で世界を語る

幼いころは日本語からかけはなれた手話を使っているとかバカになると思っていた。大学入学のため上京したわたしは、手話サークルに顔を出し、見よう見まねでいわゆる日本語対応手話を覚えた。たまに帰省すると、親やその友だちから「都会の手話だね」と言われた。だが、聴覚障害学生の仲間からは「ろう者っぽい手話でいいね」と正反対のことを言われた。アイデンティティが揺らいだ時期もあったが、手話が音声言語と同じくらいに複雑で洗練された言語であることを知ったわたしは、手話でバカになるなんてとんでもない、手話で世界を語ることができると考えているようになった。そして、手話にも世代変種、地域変種、社会変種がある。手話を探求するということは新しい世界を切り拓くことだ。

「手話」とは コーダにとっての

中津 真美

東京大学バリアフリー支援室特任助教

手話とコーダ

ろう者は手話という言語をもち、それを自分たちのことばであると語る。しかし、ろう者に添いろう者のことばをともに使用してきた、ろう者以外の一群がいる。コーダ(聴覚障がいのある親をもつ聞こえる子ども: Children Of Deaf Adults)である。

聞こえない親が手話を使用するコーダの場合は、産まれたときから日常生活のなかに手話が存在する。コーダは、親の手話を真似、親と手話で日々の他愛もない出来事を話し、ときには手話で喧嘩もしながら、手話を介して親との関係を紡いでいく。

自身の手話をめぐる過程

わたしもコーダの一人である。よく周囲から、「いつから手話を使い始めたの?」と尋ねられることがあるが、記憶にはない。わたしがいちばん初めに覚えた手話は、「終わり」だそうだ。お腹がいつ



コーダと聞こえない親の日常: 手と目でお話

ばいになると、両方の手のひらを上に、下に移動させながら窄める。「終わり、終わり」。そして親は、わたしにご飯を食べさせるのを止める。このようにして、わたしは親との日常から自然に手話を獲得していった。もともと、コーダの手話獲得の程度には個人差が見られ、わたしの弟など手話はほとんどできないが、それでも親の手話は読みとり、「風呂」「新聞」「学校」「遊び」などの

簡単な手話を交え、親に意思や感情を伝達していた。やがて青年期に差し掛かるころには、わたしは外でも積極的に手話を使うようになり、子どもながら社会に手話を広めようとした。一般に青年期は、自己意識の高まりから他者と自己との相違に敏感になる傾向にあり、コーダでは手話を使ったがらなくなる事例も見受けられる。このことは、日本のコーダにおいて、より顕著に見られる特徴であろう。けれども、わたしは違った。我が家には手話ということばがあると、明確な志向をもち続けた。

コーダのアイデンティティと手話

なぜわたしは、手話を使い続けたのだろうか。今改めて過去に思いを馳せると、「自分とは、音声日本語をもつ聴者であると同時に、手話という言語をもつ、ろう者の世界をも知り得る存在」であることにアイデンティティを置き、それが自分の強みと意識していたことが大きいと思われる。このことは、わたしが、手話に誇りを抱く親の姿勢を見て育つことができたからに他ならないと考える。

コーダにとって手話とは、自分と親とを繋ぐことばであると同時に、聴者社会に身を置きながら自己のアイデンティティを保ち続けるための手段であるのかもしれない。

聴者が手話を学ぶ

第二言語としての 日本語習得

飯泉 菜穂子

民博 人類基礎理論研究部

聴者が手話を学ぶということ

人口一億二〇〇〇万を越える日本人のうち、手話母語話者は多く見積もっても十万人、言語学的に厳密に日本手話ネイティブを算出すればわずかに数千人という立場もあるほど、手話は非常に小さく狭いコミュニティの言語である。音声がないことが当たり前というそのコミュニティには、当然、聴者とはことなる行動様式（文化）がある。わたしは、聴者が第二言語として手話を本気で学ぶということ、日本国内に居ながらにして別言語・別社会・異文化への留学を果たすようなものだと思っている。

わたしがろう者・手話と出会ったのは一九八一年。十代最後の年だった。八〇年代前半というのは、米国から遅れること二〇年、ようやく日本にも手話言語学という学問領域が紹介され始めたばかり……。ろう者集団さえ「手話は言語である」



「みんなく手話言語学フェスタ2015」の様子(壇上右側が筆者)

という共通認識を未だ確立していなかった時期である。日中は同世代の学生であるろう者と、夜の時間や週末は年齢も社会的な背景もさまざまな地元のろう者とともに手話漬けの時間を過ごすようになった。今思えば、異文化留学だ。

手話は言語という実感

手話は話者の属する世代、性差、出身（習得）地、教育歴などによって変種をもつことに気づく。手話による非常に微妙な感情のやりとりや複雑な議論を目的にしたりする。こんなに豊かで複雑で「難しく」て魅力的なコミュニケーション手段

台湾での フィールドワークを はじめるまで

相良 啓子

民博 人類基礎理論研究部

二〇一六年の秋、初めての海外でのフィールドワークを台湾でおこなった。日本手話と台湾手話は、歴史的に関係が深い言語である。一八九五年からの五〇年間、台湾が日本統治下におかれていた背景があり、日本のろう学校の教員が台湾へ渡り手話を普及させたため、台湾手話は日本手話と似ているといわれている。両者の類似点と相違点に次第に興味をもつようになり、それが現在の自分の研究テーマとなった。

信頼関係を築く

フィールドワークには、現地での計画や研究資料を作成するなどの準備が欠かせない。わたし自身がろう者なので、現地のろうコミュニティに接触しやすいというメリットはある。しかし、日本手話と台湾手話は、似ているとはいっても異なる言語である。まして、ろう者が国際交流をおこなう際に使用する

国際手話（ヨーロッパを中心として発達したもの）がうまく通じず、英語を公用語としない台湾で、どのようにフィールドワークを進めることができるのかという不安はぬぐえなかった。より良いフィールドワークをおこなうためには、現地の手話話者やその関係者との信頼関係は何より重要である。信頼関係は、お互いに共通することばを使ったりとりを積み重ねていくなかで、築かれていくものである。このやりとりをどう進めていくのか、工夫が必要だった。

試行錯誤を重ねる

IT化が進んだ現在、スカイプやラインなどのアプリをとおして、国が違ってもパソコンや携帯の画面にお互いの姿を映して手話でやりとりをおこなうことが可能になった。試しにスカイプを使ってやってみると、日本手話でコミュニケーションをとるところまでは通じにくい。その場合は、ラインに日本語と中国語（繁体字）間の翻訳ソフトを導入し、文字でやりとりをする。しかし、誤訳がまざっているため、その誤訳をモトにさらに想像を働かせて相手の言いたいところを読み取り、改めて画面の手話で確認をする、というその繰り返しややりとりが必要となった。日本手話と台湾手話の語彙をまぜながらつなぎ合わせて話す現地ろう者の手話を読みとり、こちらの理解にずれがないかどうか内容を確認する。そして、日本手話とあちらから届いた台湾手話の語

が単なる身振りやジェスチャーの集積などということはない。わたしたち聴者の使っている音声言語とは別種の、独立した、「言語」としかいいようのないもの」である。そういう実感・体感が積み重なっていったものだ。

異文化への敬意

一般に、ろう者と聞くと多くの人はまず「障がいをもつ」人と理解するのではないだろうか。しかし、ろう者⇨手話話者ばかりのなかに聴者が自分一人だけという状況を想像してみたい。そのような状況下では、手話をどれだけネイティブに使いこなせるかがキーになり、『障がいをもつ』のは手話に習熟していない聴者である自分ということになる。障がい者と非障がい者、マイノリティとマジョリティ、立場が一瞬にして鮮やかに逆転するのだ。

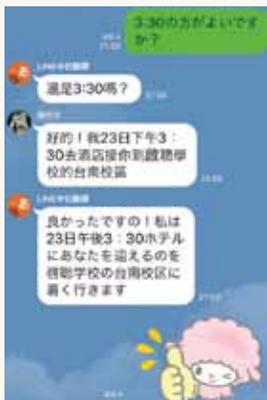
言語畑の専門家の人びとは「言語には大小はあっても上下はない」という。とびきり大きな言語である日本語を母語とし、とりわけ小さな言語である日本手話の世界に異文化留学したわたしの実感にびたりと寄り添ってくれる表現だ。第二言語習得に終わりはないという謙虚な気持ちと小さな言語を話す異文化集団への敬意、手話・ろう者・ろう文化との出会いへの感謝をもち続けたい。感謝を形にし、ろう者社会にどう還元するかを考え続けることがわたしの役割なのだと思うっている。

彙をまぜて、相手の反応を見ながら、こちらからの要望を丁寧に伝えていくことを繰り返し、どうにか準備を進めていった。

今回協力して下さった方は、多忙な方であったため、連絡がつくのがどうしても夜遅くになってしまった。そのため、ベッドに入った後にブルブルと携帯が震え、パジャマ姿でテレビ電話をすることになったが、限られた時間のなかで準備を進めるためには、外見を気にしてなどいられなかった。こうしてようやく無事に現地で台湾手話を調査する運びとなったのである。



ようやく実現した現地調査(中華民国聾人協会にて)



ラインで翻訳ソフトを導入しながらやりとりした記録

日本手話と 香港手話を 比べてみると

池田
ますみ

みんなく手話部門研究支援事務補佐員

五年間の香港留学の経験にもつき、ここでは、日本手話と香港手話との共通点や違いをエピソード付きで紹介しよう。

基本語順

日本手話 例：私、日本、帰る
香港手話 例：私、帰る、日本

香港手話を使おうとすると、日本手話の影響で語順のミスを繰り返してしまい、どーんと落ち込む。わたしと同じろうのスリランカ人の友人に愚痴をこぼしたら、「スリランカ手話も日本手話と同じ語順なの。わたしも最初の一年は何度も間違いを指摘されたわ。へへ、仲間がいたんだ。」

漢字手話

日本手話の「杉」は、「シ」の形を模写したも

の(図1)、香港手話の「肝臓」は「肝」の「干」の形(図2)。漢字圏特有の語形成法である。



(図1) 日本手話「杉」



(図2) 香港手話「肝臓」

手型も意味も同じ表現をもつもの

これには「文化」(図3)、「理解不可能」(図4)などがある。最初の「文化」は日本手話から強く影響を受けた台湾手話の一部が伝わったのだろう、と香港のろう者。「理解不可能」が同じなのは、偶然のようだ。「完全にはわからない」というのを、



(図3)「文化」



(図4)「理解不可能」

たまたま両言語で「訳がわからなくて説明しようがない」と示すようになったのだろう。



(図6) 日本手話「朝飯前」、香港手話「(金銭的に)難なくできる」



(図5) 日本手話「大丈夫/できる」、香港手話「両方大丈夫」

かかわることしか使えないんだ。

手型が同じで意味がまったく異なる表現

意味の違いを知らないと大変なことになりかねない例もある。

日本人Aさん(女性)は、Bさん(男性)に香港手話で「Aさんって日本手話も英語もできてすごいな。あなたはまだ学生なのに。見習いたい」と言われて、「何っ!？」とびっくりしたそう。プロポーズされたと思ったらしい。Bさんの発言を「あなたと結婚したい。ずっとついていきたい(つきまといたい)」と解釈してしまったのだ。香港手話の「学生」は日本手話では「結婚」、「見習う」は「つきまとい」の意味なので、Aさんが驚いたのも無理はない。

音声言語にも並行する事例がある。類似点が見られたり、部分的にずれていたたり、まったく違っていたりして、ことばというものは、観察するもの、使って暮らすものももしろい。

手話展示の空間と時間

井上史雄

東京外国語大学名誉教授

「言語を展示する」とは

国立民族学博物館の展示に手話が加わっているという。画期的なこと、最先端に行く展示といえる。他館のモデル、将来の見本になる可能性がある。手話は理屈からいうと展示が困難で、新工夫が必要である。これを空間と時間という観点から位置づけよう。

博物館の展示物は、かつては古いモノや死んだモノで、動かなかった。空間を使って見えるモノを並べた。それに対して、ヒトの話しことばは、目に見えないので展示しにくい。音が時間軸に沿って伝わるので、話しことばそのものを聞かせようとしたら、空間は少ななくてすむが、時間がかかる。今民博でやっているように、機械から音を聞かせるのが正道である。音だけだと聴きとりにくいこともあるので、画像に字幕で文字を添え、意味を示すために翻訳を文字で示すことが多い。文字だけなら二次元の空間に並べることができる、切り離して壁に展示できる。時間の次元を離れ、空間を使い、動かない。

手の動きや表情を展示する

ところが、手話言語は、意思伝達の手段として音声言語と似ているが、使う次元が多い。手話には手や体の動きがあるので、時間と空間を同時に使う。文字は二次元の紙に示せるが、手話は紙の上では十分にあらわせない。けれども最近の技術の進歩で、動画を活用できるようになったので、手話は展示の最先端に行くことになった。民博では、手話が画面に動きを伴ってあらわれる。これまでの本の解説は、挿絵に矢印がつく程度が多かったの



民博言語展示の字幕付きビデオ画面

よりよい展示を目指して

とはいえ、現展示には改良・発展の余地がある。館内三か所に手話展示があるが、わかりにくい。壁に掲示して相互参照を入れ、他の手話展示があることを示すが、古風だが、ひとつの手段である。他コーナーの関連展示がパソコン端末に出れば、もっといい。

手話はビデオテークでも見られる。ただしビデオテークの最初の画像では手話にたどり着けない。大目次だけでなく、細目次を出すとか、サムネール式に小さな画像を出すと、五十音の索引形式の画像で全体を示すとか、親切な工夫が必要だ。

本来なら、言語と音楽の部門は、ビデオテークともつと密接に結びつくべきだった。今の技術なら可能だ。展示コーナーにデジタルフォトフレームなどを置いて、ビデオテークの関連画像を瞬時に呼び出せるようにすればいい。このアイデアは全館に活用できる。館全体をネットワークで結ばばいい。展示物のそばのスイッチを押すと画面に映像が出て、音が聞こえるようになれば、インタラクティブで楽しいではないか。利用者が好みと必要に応じて、情報を受けとれる。手話の展示を考えると、展示方法が「博物館入り」にならないですみ、民博全体の革新につながる。



民博言語展示入口。左側にビデオ画面

英霊の記憶保存

黒田 賢治
国立民族学博物館現代中東地域研究拠点 拠点研究員



イランに住むわたしの知人は、殉教者の生前の姿を後世に伝える活動をしている。国家のために命を捧げた人びとの死を風化させてはいけないという彼の活動を紹介します。

イラン最大の共同墓地

イランの首都テヘラン市南部に、同国最大の共同墓地、ベヘシユテ・ザフラー墓地が広がる。イランのムスリムの場合、来世で楽園に入るため、聖者の仲介にあやかろうと、聖者廟の周辺に埋葬されることが一般的だ。しかし大都市では郊外に大型の共同墓地が造られる場合もある。ベヘシユテ・ザフラー墓地はその代表であり、東京ドーム約百十三個分の広大な敷地には、一九七〇年に開設されて以来百三十万人もの故人が埋葬されてきた。共同墓地というと日本の郊外にある霊園墓地のような寂しい雰囲気想像されるかもしれないが、それとは大きくかけ離れている。イスラームでは最後の審判まで死者の霊魂は現世に留まると考えられ、故人の命日や祝祭日、死者の魂が解放されると信じられる木曜日の午後から金曜日の午前中にかけて、人びとが墓参りに訪れる。なかでもペルシア語でシャヒードとよばれる殉教者が埋葬されている区画は、特に多くの墓参りに訪れる人びとで賑わう。



殉教者区画の墓標

英霊として祀られる殉教者

殉教者と言いつても、時代によって少しずつ意味が異なる。イランにおいては、歴史的には信仰のために命を捧げた人を意味してきた。しかし一九七〇年代後半のイラン革命期になると、革命運動のために命を捧げた人も、さらに革命直後には反体制派に殺害された人も含まれるようになった。革命後に樹立されたイラン・イスラーム共和国にとって、同体制の樹立は神聖な宗教的行為にあたるからだ。一九八〇年九月にイラン・イラク戦争が始まると、数十万の兵士・民間人の犠牲者が出た。彼らもまた殉教

者に数えられるようになった。さらに近年ではシリアやイラクの紛争に参戦したイランからの正規兵や義勇兵なども殉教者として扱われている。つまりイラン・イスラーム共和国において、殉教者とは神聖な国家のために命を捧げた英霊として理解されているのだ。彼ら殉教者は、ただの死者ではない。一般のムスリムとは異なり、来世での至福が約束された特別な存在である。神に祝福された存在として、人びとに御利益をもたらすとも考えられている。そのため彼らの墓には、その親類・縁者だけでなく、願掛けをおこない、御利益を授かるうとする人びとの訪問も少なくない。胎児のうちに「殉教」を遂げた者は、穢れなき者として、特に人気が高い。さらに彼らはときに奇跡を起こす。教育熱心であった殉教者が、自分の子どもの成績表に署名をしにあらわれたという奇跡を筆者も耳にしたことがある。



殉教者との思い出について語るモハンマド氏



上：毎週金曜日に朝食を振る舞う殉教者の母
下：殉教者を詣でる人びと



★ イラン、テヘラン

殉教者の記憶の保存
筆者の知人で五〇代半ばのモハンマド氏は、テヘラン市内の殉教者博物館に勤めている。彼の三人の兄弟はイラン・イラク戦争で殉教し、彼自身

も義勇兵として何度も前線に赴いた経験がある。彼は毎週金曜日の朝、ベヘシユテ・ザフラー墓地の殉教者区画を訪れることを習慣としており、筆者も近年の調査時には同行して共同墓地を訪れる。彼は毎週少しずつ別の殉教者区画を歩きまわり、墓参りに訪れる関係者を見つけては、生前の殉教者について聞きとり、ビデオカメラで撮影する。インタビューは出生地や家族、殉教者との関係といった決まったフォーマットに沿っておこなわれる。大抵の場合、聞きとり相手は途中で生前を思い出し、感情の高ぶりを抑えられなくなる。彼はそれをひとつの頃合いとしており、涙にくれる関係者に「なぜ泣いているんだい。殉教者は生きているよ」と語りかけ、最後のくだりとして殉教者へのメッセージを聞きとる。撮影した動画は殉教者博物館でアーカイブとして保管されるのだ。彼は十数年もほぼ毎週、こうした活動を続けてきた。平日にも、殉教者の遺族の家を訪れ取材することがある。殉教者の記憶を保存していくことに、とらわれているといつてもいいかもしれない。はじめて彼と共同墓地を訪れた帰りに、活動の動機について訊ねた。彼はハンドルを握る左手から指輪を外し、それが殉教した親友のものだと見せてくれた。多くの親友が殉教者となったにもかかわらず生き残った彼にとって、殉教者の存在を風化させないことが、彼自身が戦後を生きていくために必要なことなのだ。モハンマド氏の活動は、殉教者の記憶を保存することである。そして筆者はその記憶の保存活動をビデオカメラで記録し始めた。いつか筆者が撮りためた彼の活動記録の映像をモハンマド氏の生きた軌跡として公開しようと考えているが、全編を公開できるのは、まだ先のことになるだろう。

日時 6月18日(日)10時30分～16時30分
(10時開場予定)

会場 特別展示館、本館エントランスホール
※申込不要、参加無料(展示をご覧になる方は、展示観覧券が必要です)

お問い合わせ先
企画課「音楽の祭日」担当
06・6878・8210

連続講座

「みんなく×ナレッジキャピタル
ピース——つなぐ・かざる・みせる」

特別展「ピース——つなぐ・かざる・みせる」
に関連した連続講座を行います。ピースは、およそ10万年前にはじめてつくられたといわれ、世界各地にみられるものです。今回は、みんなくのフィールドワーカーが、ピースと人とのかわりについて具体的に紹介します(全4回)。

主催 国立民族学博物館

一般社団法人ナレッジキャピタル

アイヌとガラス玉の交易

日時 5月10日(水)19時～20時30分
(18時30分開場)

会場 グランフロント大阪北館1階

ナレッジキャピタル「カフェアボ」

講師 齋藤玲子(本館准教授)

※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員50名

ピースの魅力——みんなく展示ツアー

日時 5月21日(日)13時30分～15時
(13時受付)

会場 特別展示館

講師 池谷和信(本館教授)

※要事前申込、要展示観覧券(団体料金)、定員30名

お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・63372・6530

カレッジシアター
「地球探究紀行」
開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域ごと)に、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。

時間 13時～14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名

主催 産経新聞社

共催 近鉄文化サロン、スペース9

特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

5月10日(水)

マヤ民族とフェアトレード・チョコレート

講師 鈴木紀(本館准教授)

5月24日(水)

イタリアの家族と結婚

講師 宇田川妙子(本館准教授)

お申し込み・お問い合わせ先

ウエブ産経カレッジシアター係

06・66333・9087

●国際博物館の日記念事業

国際博物館の日を記念して、5月20日(土)にご来館いただいた方から先着1000名様にトータルボールえんひつをプレゼントいたします。

●小・中学生の観覧無料化について

開館40周年を記念し、4月1日(土)より中学生以下は観覧料が無料となりました。

●みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間直通無料送迎バスを特別展「ピース——つなぐ・かざる・みせる」の会期中に運行します。

運行日 6月6日(火)までの土曜・日曜・祝日

1日11往復、所要時間10分、無料

運休日 平日、5月13日(土)、14日(日)、20日(土)、21日(日)

※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に連休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

時	万博記念公園駅	→国立民族学博物館
10	06	36
11	06	36
12		46
13	16	46
14	26	56
15	26	56
16		
17		
時	国立民族学博物館	→万博記念公園駅
10		50
11	20	
12	30	
13	00	30
14	10	40
15	10	40
16	30	
17	00	

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

訃報 大丸弘名誉教授

本館の大丸弘名誉教授(八四歳)がさる三月一七日に逝去されました。一九七九年から九六年の本館在職中、中国地域の文化展示の基礎となる資料をはじめ、多くの資料の収集・整理に尽力され、また図書館機能向上にも貢献されました。服飾研究の第一人者として、日本と西欧の衣文化を比較研究され、その成果は『日本人のすがたと暮らし』(三元社、二〇一六年)などの著書のほか、本館公開中の「身装画像データベース」(近代日本の身装文化)等計四件のデータのデータベース構築に対し関西データベース協議会奨励賞を授与されています。謹んでお悔やみ申し上げます。

みんなくゼミナール

時間 13時30分～15時(13時開場)

会場 本館講堂

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)

第468回(5月20日(土))

心地よい暮らし(エイジング・イン・プレイス)

講師 鈴木七美(本館教授)

高齢者をはじめ人びとが孤立せず心地よく生活できる地域「コミュニティデザイン」のキーワードとして注目されている「エイジング・イン・プレイス」について、コミュニティに生きる意味を問い続けてきた米國アーミッシュたちの暮らしから考えます。



スーパーマーケットで出会ったアーミッシュたちの馬車(インディアナ州シブシェワナ)

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話す

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料について分かりやすくお話しします。

5月7日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば

華僑の移住と暮らし——タヒチ

話者 河合洋尚(本館准教授)

5月14日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば

豊かな高齢期とナラティブ

話者 鈴木七美(本館教授)

5月21日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば

マランガン儀礼と彫刻

——ジョージ・マフワン・コレクションから

話者 林勲男(本館教授)

5月28日(日)14時30分～15時 東南アジア展示場

新しい東南アジア展示場ができるまで

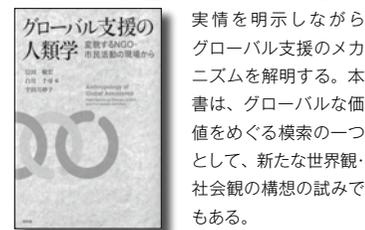
——生業と寺院を中心に

話者 平井京之介(本館教授)

■信田敏宏、白川千尋、宇田川妙子 編
『グローバル支援の人類学

——変貌するNGO・市民活動の現場から』
昭和堂 3,700円(税別)

人はなぜ、遠くの地に暮らす他者に手を差し伸べるのか? その歴史的な背景や世界各地での

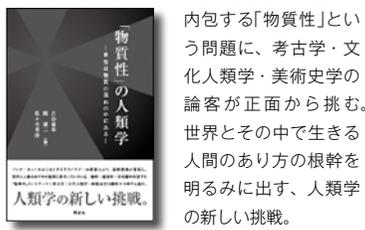


実情を明示しながら、グローバル支援のメカニズムを解明する。本書は、グローバルな価値をめぐる模索の一つとして、新たな世界観・社会観の構想の試みでもある。

■古谷嘉章、関雄二、佐々木重洋 編
『「物質性」の人類学

——世界は物質の流れの中にある』
同成社 5,000円(税別)

仮想現実が蔓延し、世界と人間のあり方が急速に変化しているいま、物性・感覚性・存在論を



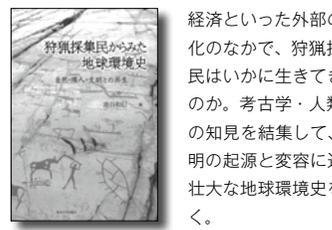
内包する「物質性」という問題に、考古学・文化人類学・美術史学の論客が正面から挑む。世界との中で生きる人間のあり方の根幹を明るみに出す、人類学の新しい挑戦。

刊行物紹介

■池谷和信 編
『狩猟採集民からみた地球環境史

——自然・隣人・文明との共生』
東京大学出版会 5,800円(税別)

数百万年という人類史のほとんどで、私たちは狩猟採集民だった。農耕民、国家や宗教、市場



経済といった外部の変化のなかで、狩猟採集民はいかに生きてきたのか。考古学・人類学の知見を結集して、文明の起源と変容に迫り、壮大な地球環境史を描く。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)

※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般5000円

第467回 6月3日(土)13時30分～14時40分

「みんなく名誉教授シリーズ

人類史のなかの遊牧

講師 松原正毅(本館名誉教授)

二〇万年におよぶ現生人類の歴史のなかで、狩猟採集で暮らした期間が大半を占めています。その意味では、言語運用能力にもとづいて成立した遊牧や農耕の生活様式は比較的新しいものといえます。これまで遊牧の起源を動物の家畜化と同一視する解釈が、おおくおこなわれてきました。実際には、遊牧の起源は、動物の家畜化に先行してみられたものと考えられます。今回の話は、遊牧の起源とともに人類史におけるその意味をとりあつかいます。

第468回 7月1日(土)

文明の転換点における博物館

講師 吉田憲司(本館館長)

東京講演会

会場 モンベル御徒町店4Fサロン

※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般5000円

第118回 5月13日(土)13時30分～14時40分

「第89回民族学研修の旅團連

モンゴル高原における遊牧民の遺産

講師 小長谷有紀(人間文化研究機構理事、本館兼任教授)
モンゴル高原では古来、様々な民族が主役の座を交代しながら、遊牧文明が維持されてきました。動物を多角的に利用し、移動によって自然や社会の変化に柔軟に対応する彼らの精神を、現在に受け継ぐのがモンゴル遊牧民です。各地にのこる史跡を頼りに、平和構築に励んだ遊牧民の暮らしを考えます。

第119回 7月15日(土)13時30分～14時40分

文明の転換点における博物館

講師 吉田憲司(本館館長)

第75回体験セミナー

三次の鶴岡漁見学と広島民俗芸能を訪ねる

講師 卯田宗平(本館准教授)

日時 7月22日(土)、23日(日)



ジュゴン (右) とジュゴンの肉塊 (左) の彫刻
右から H0123816、H0102407

◆◆◆ 神話のなかの人魚 ◆◆◆
人魚は上半身が人、下半身が魚。その
蠱惑的な女性のイメージの奥にはヨーロッパから長い航海に出た男たちの妄想が潜
んでいるようだ。特に地中海で船乗りたち
を誘惑しようとしたセイレーンの描写は、
南太平洋アフリカ沿岸のマミ・ワタ、そし
てハリウッド映画へとつながっている。人
魚のイメージのほとんどはジュゴンだとい
う説がある。丸い胴部や鰭の基部の乳房から
授乳する様子が人に近いからだろうか(ま
るで我が子を抱く人間の母親のように、鰭
で子どもを抱きかかえていると思われてい
るが、事実ではない)。しかし、人魚の民
話は古くから世界各地にあり、必ずしも

性的な要素は含まない。

一九八〇年代にオーストラリアでみんば
くの資料を収集していたとき、人魚らしい
絵を見つけた(一四ページ)。中央アーネ
ムランドにあるグニング族の領土のマン川
源流に聖なる泉があり、そこに下半身が
魚の形をした精霊が住んでいるという神話
を描いたものであった。造化神である虹へ
びと魚や水草も描かれている。人魚の精霊
は、今でもその姿を見ることがあるとい
う。人魚ならばジュゴンはないかと探したら、
東のグマツチ族の彫刻群を見つけた。しか
し、そのなかに四角いだけのものがあつた
ので何だと聞いたら「肉である」と(一五
ページ左上)。ここではジュゴンは単なる
食料でしかなかったのである。ジュゴンは
体長三メートル、重さ四五〇キログラムの
哺乳類で、熱帯から温帯の浅い海に棲む。
とりやすいので乱獲され今では絶滅危惧
種となっている。肉は栄養が豊かで珍重さ
れていたのである。日本でも南西諸島の貝
塚から出土しており、縄文時代から食料
にした記録も多い。

◆◆◆ 貨幣経済と人魚 ◆◆◆

アポリジニの神話は人、動物、植物、自
然まで混然一体となって展開する夢の世界

(ドリーミング)で、彼らの生活の規範で
あり、内容を一族以外の人に語ってはいけ
ないとされている。ところが、現在はアポ
リジニ社会も貨幣経済に巻き込まれ、彼
らの美術工芸品が貴重な現金収入源と
なっているのだが、作品のほとんどが神話
を題材としているためにその内容の説明が
必要になってきた。もちろん、神話にも儀
礼、戦闘、性交、出産など秘密度の高い
もの以外に、子どもや外国人に語ってもよ
いバージョンがある。

その例のひとつが中央砂漠のプレアデス
星団の七人姉妹の話である。しつこく迫る
男の手から逃れてついには天に昇って星に
なったという話が一般化し定着している。
秘密度が低いので美術工芸品にとり上げ
られることが多い。人魚についてもアンデ
ルセンの人魚姫のような美しい話がアポリ
ジニの絵画や彫刻にとり込まれる日が来る
のかもしれない。

文化が変容するのは受け入れ側が都合
の良いものであれば積極的にとり込んで行
くからだろう。その大きな原因のひとつに
経済がある。世界の神話に意外な共通点
がしばしば見られるのもそれが大きな原
因のひとつだと考えてよいだろう。

想像界の生物相

人魚とジュゴン

—オーストラリア・アーネムランドの神話と美術

民博 名誉教授 小山 修三
こやま しゅうぞう

資料名 | 樹皮画 ヤウキャウク (水の精) と虹へび

標本番号 | H0085718

民族 | グニング族

地域 | アーネムランド、オーストラリア

サイズ | 縦 134 × 横 69 × 厚さ 0.4

※サイズの単位はセンチメートルです



新世紀ミュージアム

米国南西部先住民ズニは、自身の文化を復興し継承していくため、ニューメキシコ州に自ら博物館を設立し運営している。自治政府 (Zuni Tribe) の登録数だけでも約二万二〇〇〇人にのぼるズニのひと。彼らの文化のよりどころとなる博物館の活動を紹介する。

米国先住民コミュニティと先住民資料を所蔵する博物館との関係は、一九九〇年制定の「米国先住民墓地保護・返還法 (NAGPRA)」の法整備や、先住民が運営するトライブ博物館の出現により、この数十年あまりで劇的に変化してきた。およそ二十年前に文化人類学者のジェイムズ・クリフォードが先駆的に述べたように、旧植民地支配国の収集者や収蔵機関の所有物だと自明視されてきたモノが、先住民自身が運営する博物館の要請によって返還されたり非公開にされたりしている。

文化復興のための博物館

アシウィ・アワン博物館・遺産センター (通称ズニ博物館) は、一九九二年にズニ成員が運営するNPO組織として保留地内に設立されたトライブ博物館である。博物館機能には、収集、

保存・管理、研究、展示、資料を活用したワークショップといった来館者サービス活動などがある。これらに対してトライブ博物館に顕著な特徴は自文化表象である。この場合、情報を利用し、展示を見るのは、ズニのコミュニティの成員である。そのあらかのひとつだろるか、ミュージアムショップは併設されておらず、ズニの文化を消費するような土産物の販売はおこなっていない。彼らが注力するのは、現在では廃れてしまった伝統的農作業や美術工芸品制作の復興だったり、ズニのコミュニティにとって歴史・宗教・言語的に重要な出来事や地名を地図上に描き加える「アート地図計画」だったりする。博物館のミッションは、ズニのコミュニティ成員のための文化活動の実施および支援、そして対外的な交渉なのである。

展示および博物館活動

決して広くはない館内には、人骨収奪の様子の再現展示や、ズニを調査した民族学者・人類学者の肖像画やフィールドノート、ズニのクラン (氏族) 神話に基づく移住史やアート地図などが展示されている。一方で、ココとよばれる超自然的存在を象った木彫人形やその仮面などの特定の儀礼具は収蔵庫に納められており、展示されていない。本博物館がこの十年で主と



ズニ博物館外観 (2010年)



ズニ博物館内で展示中のアート地図で描かれた絵画。ズニ保留地周辺の地図上に、ズニの神話の登場人物が描かれている (2017年)



ニューメキシコ州インディアン・ブエプロ・カルチャルセンターで開催されたアート地図の巡回展「A:shiwi A:wan Ulohnanne: The Zuni World」 (ズニ博物館ホームページより転載)

してとり組んできたのが「協働カタログ制作」計画である。欧米や日本の博物館が収蔵するズニ関連資料を熟覧調査し、博物館が管理してきた情報やあらたな知見をデータベースに統合することで、地元での一元管理を目指すプロジェクトである。これは、モノと所有権の委譲というNAGPRA以降に見られる資料返還とは異なる、外部の博物館と先住民との関係構築に向けたあらたなとり組みとしても評価されている。

博物館活動の影響力

ズニ博物館 (ジム・イノーテ館長) はこれまでに、アメリカ人類学会の博物館人類学部門がその分野での革新的活動に授ける「マイケル・M・エイムズ賞」(二〇一〇年) と、国際学会組織の A T A L M (Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums) が管轄する「文化と生活様式の守護者賞」(二〇一三年) を受賞した。彼らの活動が学会から評価された理由は、「自分たちのための博物館活動」を掲げ、それを具体的に実施し、現代の米国先住民のこの種の活動を牽引しているからだだろう。そして特

に運営者や参加者にトライブ政府やトライブ博物館などの文化施設職員が多い A T A L M は、先住民に関する公文書、図書資料、物質文化や映像・音響資料を扱う研究者 (文化人類学、生物人類学、歴史学、法学、情報学、言語学、文化保存学など) と実務者との交流の場となっているため、受賞事実が他のトライブ博物館にさらなる影響を与えていくのである。

ズニ博物館は、ズニについての理解を深めようとするよそ者のための観光施設ではなく、ズニの人びとのための文化施設たることを謳う。そして伝統知を継承する地元の人びとや、考古遺物などの継承者のための情報収集と情報還元を優先し、例えば一部の特別な人しか知りえない宗教的知識や儀礼具が外部の博物館に収蔵されている場合に非公開依頼を出すなど、伝統知の継承や共有に関して生じかねない齟齬を最小限にとどめようと努力する。ズニ博物館が展開している展示される側だった人びとのプレゼンス強化や、土着の文化的文脈を尊重した資料情報管理というこれまでにない活動の在り方に、学界や実務者の注目が集まり、さらなる展開を見せようとしている。

中国雲南省モンの刺繍から手芸を考える

宮脇 千絵

南山大学人類学研究所第一種研究所員・人文学部准教授

従来、モンの女性にとって刺繍は家事労働の二環であった。しかし、既製の刺繍布が簡単に手に入るようになった今でも、余暇を使って楽しみながら刺繍に勤しむ女性がいる。彼女たちにとって刺繍とは、そこに手芸との接点を探る。

「ほら、これわたしが刺繍したのよ」
 そう言って二十代のモン女性が見せてくれたのは、カラフルな糸で八角形の花をかたどった刺繍だった。わたしは彼女が幼いころに刺繍を習ったことがあるのは知っていたが、実際に刺繍したと聞いたのは初めてだった。二〇一五年二月のことである。



母親に刺繍を習う姉妹(2007年)

出稼ぎ先での刺繍
 中国少数民族ミャオ族のうち、主に貴州省西部から雲南省の山地に居住するのがモンと自称する人びとである。雲南省文山州のモン女性の衣装は、大麻を素材とする。大麻を栽培し、績み、織る。そこに藍染めやろうけつ染め、刺繍をほどこす。これらの作業は一貫して女性の仕事であった。彼らが主食としているトウモロコシの収穫が終わる秋から旧正月にかけての農閑期が、

モンの衣装製作の時期にあたる。旧正月には必ず新しい衣装を準備し、着飾って旧正月三日目から開催される当地のモン最大の祭りに出かける。新しい衣装を着ていないと、お金がないからだとか、衣装製作ができないからだとか、周囲の女性たちから後ろ指を指されることになる。
 とはいえ、わたしが調査に入った二〇〇七年には染織はほとんどおこなわれていな



20代女性が広東省の出稼ぎ先でおこなった刺繍(中央部分が八角形の花モチーフ)で仕立てたスカート(2015年)



かった。工業製の化繊布や既製のモン衣装が手軽に入手できるようになっていたからだ。

しかし刺繍は別であった。農閑期には、集まっておしゃべりに興じながら刺繍をする女性たちが見られた。現在でも多くの女性は、幼いころに母親など身近な女性から刺繍を習う。就学すると刺繍をしなくなる人が大半だが、驚いたことに、出稼ぎ先で刺繍をする若い女性たちがいるのだ。

冒頭で紹介した女性も、染織や衣装製作の技術を習得することなく育った。そのため毎年旧正月に新調する衣装は、母親に作ってもらっていた。町の学校に通っていた彼女は、普段洋服を着て過ごす。刺繍をする時間もないし、する必要もなかった。しかし出稼ぎ先では、三交代制の工場勤務の合間に宿舍で刺繍をしていたという。「テレビを見ても面白くないし、遊びに行くには町は遠い。宿舍で話し相手もいなくてひまなときに刺繍していたのよ」と言う。そして旧正月にその刺繍布をもち帰り、母親にスカートに仕立ててもらって着用した。

わたしはそれ以外にも、仕事の合間に刺繍をする若い女性を見ていた。文山州にあるモンの衣装を専門に生産・販売をする服飾工場には、周辺の農村から十代のモン女性たちが働きに来ていた。彼女たちは住み

込みで、朝七時半から夜二時ころまで働く。長時間、服作りに従事しているにもかかわらず、休憩時間になると刺繍に勤しむ女性がちらほらいた。彼女たちもまた、その刺繍布を使用して新年を迎えるためのスカートを作る。

モン刺繍から手芸を考える

興味深いことは、刺繍が賃労働に対して、余暇におこなう活動としてあらわれてくることだ。従来ならそれは、農作業、家事、育児そして衣装製作という女性が担うべき労働の一環であった。すでに大麻栽培や染織はおこなわれず、女性たちは布作りという「重労働」をしなくてもよくなったことを喜ぶ。市場で既製のモン衣装を購入すれば即着用できる。自作する場合でも、市販の化繊布に機械製刺繍布をミシンで縫い付ければ、短時間で製作できる。労力を費やして布作りをせずとも、新しい衣装を準備できるのだ。

それでも出稼ぎ先で、仕事の合間をぬってわざわざ刺繍をするのはなぜだろうか。ひとつは、そ

の行為自体が女性たちの楽しみとなっていたからだろう。染織のように大がかりな道具や空間、まとまった時間が必要なく、一人でどこでもすぐにとりかかれる刺繍は、余暇におこなう活動として最適である。また彼女たちに、なぜ刺繍をするのか?と尋ねれば、ほとんどの女性が「モンだから」と答える。市販のもので代替可能であるにもかかわらず、あえて自らの刺繍でスカートを装飾することにモンとしての誇りをもっていることがうかがえる。

モンの刺繍は、女性の賃労働への参入や、代替可能な工業製品の普及によって、失われるどころかかえって、余暇に、楽しみながら、あえて作るものといった手芸らしい様相を見せはじめているのかもしれない。



服飾工場で休憩時間に刺繍をする女性(2007年)

ナンが名ぢゃ

What's in a name?

寺村 裕史
てらむら ひろふみ

民博 人類文明誌研究部



海外のモノや事例について、日本語でエッセイ・論文などを執筆するにあたって、いちばん困る(あるいは、気を遣う)ことが、現地語の読み「カタカナ表記」である。名は体をあらわす、というが、名前(の表記)が一字違っただけで、受ける印象が大きく変わってしまう場合もあるだろう。ここでは、そういった事例を紹介しながら、名前のカタカナ表記について考えてみたい。

まず、読者のみなさんは、食べ物「ナン」と聞くと何を思い浮かべるだろうか。日本でまずいちばんに想像されるものは、インド料理とセットになった「ナン」なのではないかと思う。日本のインド料理店では、一六等分されたピザを巨大にしたような平たいパン(ナン)が、ほぼ例外なくカレーと一緒に提供される。

しかし、世界の他の地域を探してみると、ナンとよばれていても、円形や楕円形であったり、作り方・焼き方が異なるなど、さまざまなナンが存在する。筆者が調査でよく訪れるウズベキスタンでは、東部の都市サマルカンドで売られているナンが国内各地でも有名なのだが、

我々がイメージするインド料理店のナンとは形状や食感も大きく異なる。そのナンは、比較的しつかりした歯ごたえで、形



サマルカンドの「ノン」(インド料理店で出されるナンとは、味も形もまったく異なる。表現が難しいが、味はロールパンに近く、食感はそれをぎゅっと圧縮して硬くしたような歯ごたえである)

は丸く直径二十センチメートルほど、厚みは三〜五センチメートルくらいあり、中央が深く窪んでいて、窪みに装飾が施されているものもある。

このサマルカンドのナンであるが、旅行ガイドブックなどでは「ナン」と書かれているものが多い。けれども、みんぱくの中央・北アジア展示場の解説パネルには、現地語の発音に忠実に「ノン」と表記されている。この場合、インド料理の「ナン」と、ウズベキスタンの「ノン」は、味も形も異なる「別のモノ」ととらえれば、名前が違っていてもそれほど違和感はないかもしれない。

一方、逆のパターンで、「同じモノ」を指すにもかかわらず名前が異なる例を挙げてみたい。筆者が高校生のときに世界史の授業で習った、インダス文明でもっとも著名な都市遺跡の名前は「モヘンジョ・ダロ」であった。しかし、現在の教科書では「モエンジョ・ダロ」と記載されている。教科書の改訂で、より現地語の読みに忠実になるよう表記が変更になっただけ、と単純に割り切ってしまう方がいいのだが、筆者には別の遺跡のように思えて仕方がない。そして、いざ文章で言及する場合にどちらの表記を使えばよいか悩んでしまう。「今の教科書では、こう表記されているのだから」という理屈では、なんとなく納得がいけないのは世代差の癖(ひが)なのだろうか。

現地語読みを日本語(カタカナ)表記しようとする、このような問題がつきまとう。慣れ親しんだ名前ほど、カタカナが一字違っただけで生じる違和感は大い気がある。

編集後記

昨年度よりみんぱくには手話部門ができています。今号はその部門の紹介を兼ねて手話とその研究の特集を組むことにしました。手話の世界とその研究の一端について触れることができれば幸いです。部門ができて、小生のまわりで一番変化したことは、教員が一堂に会する会議の場に手話通訳者が同席するようになったことであろうか。それ以外にも細かなことで、健聴者である自分の物事の進め方を反省することがある。こうした意図しない思い込みを意識するようになったことも、手話を中心とする部門ができたひとつの効果だろう。思えば本館の初代館長である梅棹忠夫は館長職に在任中に失明しながらも、その職を務めた方であった。ただ新しい部門が生まれたという以上に、それを新たな糧として人類文化の未来につながる新しい何がしかのアイデアが生まれてくることを期待したい。(丹羽典生)

●表紙：イラスト 門秀彦
 ハンドトーク ジラファン ©KADO/Handmade Creative 2017

次号の予告

特集

沖守弘 インド写真データベース (仮)

月刊みんぱく 2017年5月号

第41巻第5号通巻第476号 2017年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
 編集委員 丹羽典生(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
 南真木人 山中由里子 吉岡乾
 デザイン 宮谷一款 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人千里文化財団
 印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
 お願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

開館40周年記念特別展

「ビーズ」に行ってみよう！

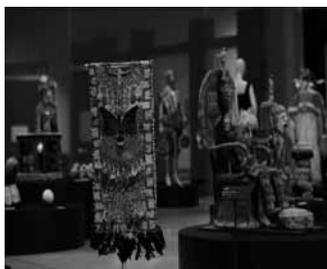
現在、本館特別展示館では「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」が開催中です。

素材も見た目も鮮やかな世界各地のビーズがみんなぱくに集結しました。今回の展示の見どころを紹介します。

見どころ ①

世界的に貴重な ビーズが見られます

色・形・大きさ、そして素材もさまざまな世界のビーズ。展示場に一步踏み入ると、そこには世界中のビーズが並び、目移りしてしまうほどの美しさです。アクセサリーのほか、衣装にあしらわれたビーズにもぜひご注目ください。これまでみんなぱくで展示されたことがない珍しいもので、今回はじめてみなさんの前に登場する資料もあります。



見どころ ②

ビーズ作品を作って もち帰ることができます

2階の体験コーナー「自然素材をビーズにしよう」では、実際にタカラガイやジュスダマに穴をあけて、ひもでつなぎ、オリジナルのビーズを作ることができます。はじめてビーズ細工に挑戦する方でも大丈夫。穴をあける工程はボランティアスタッフがご説明します（「穴をあける体験」の開催日は当館ホームページをご覧ください）。



見どころ ③

ビーズに触れて 身につけられます

観覧の最後は「ビーズにふれる」コーナーにお立ち寄りいただき、ビーズのできたいろいろなものに触れてみてください。見るだけではわからないビーズの質感や重さが体験できます。ビーズのできたネックレスや衣装を身につけて写真撮影も可能です。ビーズで身を飾る楽しみを感じていただけます。



みんなぱくをもっと楽しみたい人のために———会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。

電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、「月刊みんなぱく」や会員機関誌「季刊民族学」などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館

キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

みんなぱくフリーパスを有効期限内に再登録いただくと、登録期間がひと月延長になります。
お手続きの際、ぜひご利用ください！